

宿縁

一月号

浄土真宗
本願寺派

中原寺

TEL 〇四七―三七二一―〇二九二
FAX 〇四七―三七二一―〇二六一

千葉県市川市国府台五丁目二十六番三十九号

人間道から仏道へ 耳目を向ける



元旦は新しい歳の初めをいい、且という字は太陽が地平線から出るさまを表しています。すなわち夜明けの意味でもあります。昨年暮れに村上志染（しぜん）作の「水馬（みずすまし）」という詩に出会いました。方一尺の天地
水馬、しきりに円を描ける
汝、いずこより来たり
いずこへ旅せんとするや
へい、忙しおましてナ
わずか一尺四方の小さな水溜り、それが水

馬の世界です。その小さな水溜りのなかを水馬はとびまわって、絶え間なく水の上に円を描いています。水に円を描いても、描くはしから消えて何も残りません。字もまた同じであって、空中に筆を走らすようなものです。まったく無意味な空虚な営みにほかなりません。その水馬にむかつて「お前はいつたどこから来たのか。どこに行こうとしているのか」と呼びかけます。いくら問いかけてもむだで、まったく耳を傾けようとしません。いぜんとして水の上に円を描きつづけています。詩人はこの水馬に私たち人間の現実を重ねあわせて見ているのです。この水馬のありさまはそのまま私たち人間の姿ではないのか、と人生についての根本的な問題を提起しています。「忙しい」とか「暇がない」とかいつているのは、生死（迷いを繰り返すこと）の問題を考えて明らかにしない言い訳であり、人生の真実を求めようとしない口実にすぎません。詩人は、人生をただあわただしく走り回っているだけでよいのか、それでは心安らかに人生を歩むことができないではないか、と呼びかけ、「生死（しょうじ）を超えろ」ことこそ人生のもっとも大切な目的であろう、と問いかけているのです。夜明けとは目覚めです。眠りから覚めることです。夢から覚めて現実を知ることです。今は長寿の時代に入って現実を見据え

ることがどんどん遠ざかってきているように思います。仏陀釈尊は「過去を追うな、未来を願うな。いま、ここ、というその場をよく観てなすべきことに努めよ」とさとされました。「汝自身を知れ」ということは、人間の根源的なまた究極的な課題ですが、その問いにこたえていこうとするところに、人間であることの何よりのしるしがあります。「忙しおましてナ」とはこの人生の大切な問いを疎かにしている、現代のわれわれのありかたではないでしょうか。

長寿社会を生きる感覚の恐ろしさは、いま、ここ、をぼんやりと眺め、きびしい無常という人間存在に焦点を合わせることが鈍くなることです。無常を知るものには明日はなく、いまなすべきことに全力を傾けるのです。「なすべきこと」とは、いうまでもなく、さとのりの真実を求めることであって、明日があると考えていると、そのことが疎かになっていきます。「平生が大事だ」といいますが、平生とは、つねにいま、ということであり、一瞬一瞬を大切に生きることを教えています。「いそげ、いそげ、明日はない」と自ら自身の心にムチ打って励まし、努めなくては、大切な人生の問題に耳を傾けることはできないでしょう。それではいつまでたっても仏法を聞くことができません。

現代の私たち人間のまわりには、あまりにも多くの現実的な問題があふれています。それに埋没しては求めるべき自己の真実を見失ってしまいます。

俳聖とたたえられる松尾芭蕉は、臨終三日前、辞世の一句を懇請する弟子たちに「平生すなわち辞世なり」といった、と伝えられて

います。このことばは、「平生すなわち辞世なり」あるいは「一生すなわち死なり」といつても同じであって生死一如の心を語っているのです。平生とは、いまこのいのちの一瞬、一日一日のいまであり、臨終とは、このいのちが終わるとき、すなわちその瞬間ということなのです。芭蕉は、平生が、今日の一日が、生涯のすべてであり、終わりである、といっているのです。

「仏法には明日と申すことあるまじく候。仏法のことはいそげいそげと仰せられ候なり」（蓮如上人御一代聞書）

という心が、仏法を聴聞する上で何より大切な心構えですが、芭蕉のいつていることも、その精神において変わりはありません。僧文暁（ぶんぎょう）編『花屋日記』には、「昨日の発句は今日の辞世、今日の発句は明日の辞世、わが生涯の発句ごとごとく辞世ならざるなし」とその心を伝えていきます。つまり一日一日がいつも生涯のすべてであり、終わりである、という人生についての芭蕉の悟りがあり、その心をもって句を詠みつづけたのです。したがってどの句もみな彼の生涯の句であり、辞世の句であって、死に臨んでわざわざ「辞世の句」を詠むことは芭蕉の心にはまったくなかったのです。その意味からも芭蕉はまさしく求道者であり、人生の達人であったのです。

お互いに新しい年のいのちをいただいた今こそ、きりのない世間への関わりを少しでも転換して仏法に耳と眼を向け、もう一つの大きいそして広い世界があることに目覚めなければなりません。無常から常住の世界へ、一步を踏み出す勇気を持ちましょう。

【寺灯雑記】

○清掃奉仕で一年の締めくくり

12/28

年月の流れの速さを感じつつ門徒有志20名近い方々が参加して、山門からの参道や客殿その他の清掃作業にご奉仕くださいました。

辞書に、奉仕とは「つつしんでつかえること」とあり、仏教徒としては、平素の如来さまのお救いとお育てを被っていることへの報恩感謝のつとめとして、もっとも大切な布施行です。

寒い中での作業が済んだあとは温かいすいとんが用意されて、戦後に食べたすいとんの思い出を話題にしながら一段と美味しく頂戴いたしました。

ご奉仕ありがとうございました。

○元旦修正会で元朝を迎える

1/1

新年の幕開けは、穏やかに晴れあがった早朝8時から本堂において元旦修正会が勤まりました。

行事鐘がつき鳴らされて、参詣者一同で正信念仏偈を唱和し、本年もお念仏の声高らかに第一声を口にすることができたよる喜びをかみしめました。

年頭にあたりご住職からそして前住さんから挨拶と法話があり、6世紀ごろインドで発見された「零の概念」を例話しながら「無」を数字で表現した数字の意味の面白さと釈尊のさとりに通ずる「無我」すなわち「とらわれない心＝純真」への帰帰を、共に新年のスタートにしたいとお話を伺いました。

そのあと恒例のご流盃がみんなの盃に注がれ、門徒総代福島佳行さんの発声で新年を祝いました。

また恒例になった「京風おぞうに」の接待を頂戴しつつ、お互いに賀詞の交換を致しました。

○仏婦が年次総会と新年会に集う

1/13

新年度に入り婦人会の年次総会が11時から開催されました。

本山では毎年1月9日から16日まで親鸞聖人報恩講法要が修行されるため、当寺仏婦は毎回年次総会開催に先立ってご正忌法要が勤められます。坊守さんの代表焼香があり、参加者30名によって正信偈が読誦され仏教婦人会綱領を唱和しました。

年次総会では今年度役員改選時期にあたることから会長に本間芳子さんが再任され、新たに副会長に山本由美子さん、書記に水澤幸子さん、新理事に酒井昭枝さんの就任が了承されました。また議事の中で今年度の例会においての学習を「七高僧」にすること。今年3月に横浜で開催される東京教区仏教婦人会連盟結成60周年に当寺から一人でも多く参加したい旨の要望がありました。最後にご住職が挨拶し、昨年若手僧侶が企画発案した築地本願寺の本堂での映像化した教化方法が多くの人々の関心と呼んで参詣者が増えた実例を取り上げ、時代の変化に対応した布教法が必要であり、その工夫と行動に女性の力も発揮してほしいと話されました。

閉会後の新年会では昼食を囲みながら歓

談、余興に入りました。吉例となった前住さんの落語は「粗忽の釘」、勝手につけた今年の落語家名は「柳家大惨事」、真打で有名な柳家小三治に弟子入りを志願したという作り話を枕に迷？調子振りを披露しました。

変わってあでやかな和服姿の美女？三人、(前田さん、水澤さん、篠田さん)がそれぞれに本格的日本舞踊を披露、新春の雰囲気を醸し出して拍手喝さいを浴びました。

○お仏飯米進納

寄進 錦織春海様
寄進 福島道宏様

【法座・行事の案内】

○常例法座

・一月二十一日(日) 一時

法話：村上弘樹師(都市開教専従員)
本年の初法座なのでお汁粉の接待があります。どなたでもお誘いになつてお聴聞ください。

○門信徒会役員会(門徒総代会合同)

・一月二十一日(日) 三時半

○和讃に学ぶ(正像末和讃)

・一月二十七日(土) 三時

親鸞聖人作のご和讃を前住職が分かり易く解説、参加者で語り合います。気軽におでかけください。

○壮年会年次総会、新年会

・一月二十八日(日) 二時半

○婦人会法座(入会員募集中！)

・二月三日(土) 一時

釈尊が覚られた教えの要は浄土真宗としてインド・中国・日本の7人の高僧によって親鸞聖人に伝えられた。宗祖がそのお徳を尊敬された7人の高僧とはどのような方がたなのかを法座で学んでいきます。

仏教讃歌や童謡を唄ってリラックas、希望者にはヨガもあります。

○壮年会法座(入会員募集中！)

・二月十日(土) 三時

日常語になった仏教のことばはとても多くあります。しかし本来の意味を誤解して使用していることばも数多くあります。それだけにその重要な仏教語を正しく理解できれば、仏教がわかつてとても楽しくなります。

法座では案外身近な日本語になった仏教のことばを尋ねていきます。

○子育てサロン(パンダっ子)

・二月十三日(月) 十一時～二時

子育て中の親と子の広場です。沢山の遊具に囲まれお話をしたり聞いたり楽しい時間を共有します。

【一月の掲示板のことば】

仏の慈悲は
私に 善の資格を 要求しない